



連載

挑戦

～県農業試験場のプロジェクトX～④

病害との戦い続くビール麦

本県がビール麦（二条大麦）生産で全国一を誇っているのは①平坦で水田面積が広く、しかも乾田（水はけが良い水田）が多い②二毛作が可能

能で、水稲の後に麦を作付できる③転作作物として農家が意欲的にビール麦を栽培している④県農業試験場が次々に新品種を開発・育成した

などが挙げられる。県農業試験場におけるビール麦品種開発の最大の目標は、罹病すると収穫皆無になる大麦縮萎病（ウイ

麦芽の特性改良に苦心

夏はビールの季節。大手ビール会社の新製品が続々登場、PR合戦に火花を散らしている。栃木県は29年連続でビール麦（二条大麦）受渡量日本一。それを舞台裏で支えているのは県農業試験場だ。しかし、病害で壊滅的な打撃を受けるなど長い間には幾多の試練があった。「病気に強く、ビールにしやすい品種を作ろう」。研究スタッフの思いは一つ。苦境に立たされても諦めずに前進を続けた。

ルス病）に強いことだ。さらに農家が栽培しやすく、収量の多さも必修条件となる。

実需者であるビール会社からは、醸造に適した品質を求められる。そのためには麦芽を溶かして麦汁を作り出す時の麦汁に溶け出すタンパク質の量が適正なビール麦を作らなければならぬ。県農業試験場の研究スタッフは難題をクリアして次々に新品種を開発してきた。

しかし、その間には、絶え間ない戦いの日々があった。

世界初の抵抗性品種を開発

昭和五十八年春、葉が黄色くなつて株が枯れる「黄枯れ病」＝大麦縮萎病の蔓延によって県内の大麦栽培農家は壊滅的な打撃を受け、一面の麦畑が真っ黄色に枯れ、見るも無残な姿となった。

危機感を持った県農業試験場の研究リーダーは、早生・多収・高品質で抵抗性のある「栃系一四四」を「関東二条二十二号」として奨励品種決定試験に供することを決断した。しかし、この間も縮萎病はますます猛威を振るい、昭和六十年産